

南半球の船（2016.12から2017.3）秋口記

1. 概要

・昨年12月から3月にかけて104日間、アフリカ、南米、南極の船旅をしました。新聞などに良く掲載されているピースボートに乗船です。ピースボートが船内各種プログラム・イベントの企画立案運用などソフトを担当、(株)シーホークス所有のオーシャンドリーム号が船の運航・食事・宿泊などハードを担当、(株)ジャパングレースが船をチャーターし、入出国の管理やオープンショナルツアーなど全体の連携を含めた運営をしています。ただ、NGOピースボートと銘打ちながら、(株)ジャパングレースが実質的に統括しているようで、若者ならいざ知らず、社会経験の豊かな参加者からその関係・役割分担が不明瞭で怪訝な思いを感じた人が多かったようです。

興味深いのは新聞と各地のポスターが宣伝・広報の主流であり、ポスター貼りなどにはポイントがついていて乗船料金の割引に使い、全額これで拠出した強者も居ました。また、語学などに堪能である船内ボランティアなどとして無賃乗船ができます。なお、一般の旅行会社などは乗客集めに関与していません。

・料金的には1人、2人部屋も有りますが、2段ベッドが2列の4人部屋ではビザ取得やサービス料を含め基本170万円程、それ以外にツアーや洗濯代・お小遣い・買い物費などが追加になりますが、慎ましく過ごせば費用は200万円余です。

船の総トン数は3.5万トン、建造は35年前、乗客定員は1422人の中型クルーズ船、乗員として船長はウクライナ人で、インドネシア、フィリピンなど多国籍で構成され350人です。乗客は約1000人、構成は日本人主体ですが、今回からは中国、香港、台湾、シンガポールなどから100人程度が参加し、男女比は女性55%、年齢構成は50歳代まで25%、60歳代40%、70歳以上35%で中位年齢は67歳あたり、最小は2歳で最高が92歳、また、リピーターは30%、1人参加は60%でした。かつては若者が主体でしたが、今は高齢者が過半を超え、外国人も参加しています。

・各クルーザーを飛行機に例えて大略比較すると飛鳥IIはファーストクラス、日本丸などはビジネスクラス、ピースボートはエコノミークラスの感じです。飛鳥などは日本人的なサービス、丁寧でかゆいところにも気を配ってくれ、悠々自適で安心お任せの船旅を楽しめます。ピースボートは昔から大幅に減ったとは言え若者が15%程居るのが大きな特徴で、彼らの多くは船内行事に積極的に関わり、物事の進め方などで粗さは目につきますがとても元気で、時には斬新・唐突な発想を示してくれ、高齢者も彼らと前向きに関われば、世代間の交流などを大いに楽しめる数少ない船旅・経験と言えましょう。

他方、団体行動になる船旅は意外にドライな対応で、陸上旅行で帰船時間に遅れたり、パスポートを紛失したり、風邪やけがなど軽度のもはよいが重病や大けがで病院治療(旅行保険で対応可能)が必要な時は下船となります。手続きなどの援助はありますが自己責任・負担で次の地からの乗船を目指すか、船旅を断念するかを判断せざるを得ず、今回も何人かいました。

2. 乗船のきっかけと船内生活

・自分史を書こうと考えその構成や項目整理をしていました。目標文量を12万字程度と考え、当初自宅に籠もり30日程度かけるつもりでしたが、こつこつ自宅での作業は何故か味気なく、つまらなそう。これまでピースボート船旅の記事が頭に残っていて、この旅の日数だと午前をパソコン作業に充てれば十分書き上げ可能、午後は船上でのんびり雑談をし、我が残りの人生の過ごし方を考えることが出来る

はず。このためデスクパソコンしか持っていなかったのが、新たにノートパソコンを購入し、事前練習したのですが高齢者に機械は冷たく、ワード作文のみでモバイル機能は使えませんでした。

・この船旅は何せ忙しく、じっとしている人はまれです。カルチャー講演としてその道の専門家から自然保護とサファリ観光、日・中の言葉を通じた文化比較論、世界遺産、コロンビアの人権問題、エネルギーの将来、南極を含め訪問各地事情など興味深い話を広範に聞かせてくれますし、講師の作業支援グループに入るとより昵懇に講師とおつきい出来ます。また、英語、スペイン語などの講座も有り寄港地を前にした特訓には有効のようです。乗客を主体とした自主企画は幅広く、あえて列記すれば囲碁、将棋、麻雀、写真、水彩画、編み物、俳句、詩吟、百人一首、ウクレレ、尺八、合唱、社交ダンス、サンバ、気功、ヨガ、太極拳、ラジオ体操、ノルディック・ウォーキング、卓球、テニス、サッカー、太鼓、南京玉すだれなど多彩でこれらの発表会が中間と最後に有り、さながら高齢者の学芸会、皆喜々として登場していました。加えて県人会や同世代の会などが毎日発行の船内新聞で参加を呼びかけられ、クリスマスツリーを飾り、船内紅白歌合戦や餅つき大会、元日にはしっかりおせち料理を食べ、中国正月(春節)を祝い、運動会もありました。また上層階の電気を消した夜の星座鑑賞会など印象に残る企画が続きました。NGOとして訪問地でリサイクル品を配り、人的交流プログラムなどは有効でしょう、ただ沖縄、人権やODAの課題などをテーマにした講演などは、その素材や取り上げ方などが一面的で有り、私にはかなり強い抵抗を感じました。全体的に言えば若人や元気な人をうまく巻き込むイベント運営のノウハウは豊富で、卓抜していてなかなかのもの、高齢者もこのあたりを心得て船旅を楽しんでいました。

船内生活として、デッキと船内とでは温度差が大きく、中古船なので船室内の温度・湿度調整は細かく出来ない所があり、残念ながら喉を痛め、風邪をひく人がかなり多く、またインフルエンザの場合は個室に隔離されその室料も請求されるなど、体調管理に留意しないとせつかくの楽しい旅に水を差す事態となります。船員達は食事の世話、船の清掃・点検・補修など本当に働き者、我々のつたない英語にもにこやかに対応してくれこれには満足だっと思います。

・地球一周するとき船の時差の調整はどうすると思いますか。地上であればその地に応じた時差が決まりますが、船では経度と船速などを勘案し船長が前日の24時に時計の針を動かすように指示し、それに従い乗客は1日のプログラムを考えます。したがって、西回りでは旅行中に1日消滅の日が有り今回は3月8日でした、東回りでは逆に同じ日が生まれます。また、寒流・暖流の違いは実感以上に大きなもので、南アフリカや南米の東側は暖流南下、西側は寒流北上でこの気温差は大きく、私も南アフリカ前後で喉をやられ10日間の禁酒、同室の仲間に5日ほど、喉の痰が切れず咳などで迷惑をかけたが優しく労わってもらいました。

各地の港でのパイロット(水先案内人)、タグボートの活躍は船旅でなければ分からないことで、大型船は時速4ノット以下では舵がきかなくなるので、ブリッジと連携しながら狭い港域を縦横に動き、見事接岸・離岸させてくれ、その活躍ぶりを皆で手を振り大いに感謝しました。

・私は基本的に、朝5時半に起き、6時から太極拳、ラジオ体操、ノルディックの準備運動までつきあい体をほぐし、7時過ぎから9階デッキで朝日を浴びながらゆったり野菜沢山の朝食、その後午前中は自分史作りに専念し、デッキで大海原を眺めながら再び麺類と野菜の昼食をとります。午後は幾つかの講座を聞き、合間に狭いながら檻の中でテニス仲間とボレー打ち、加えて30分から1時間の歩きで汗をかき、シャワーを浴びながら下着の洗濯、夕方デッキでウィスキーをなめながら日の入りや夕焼けを

眺め、高齢者に優しい日本食の夕食をいただき、20時から興味深い映画が有るとじっくり見てから眠ることにしていました。なお、自分史は旅行前半で終了しましたので、後半は念願のハーモニカに取り組みました。ただ、全体の賑やかな雰囲気とは異なり、静粛を求め孤独を愛した数少ない乗客のようでした。

3, 船内で感じたこと

・乗船した人の中には杖や介護イスを必要とする人が居るものの、心は元気な方々が殆どです。したがって人生経験豊かな方々があれやこれや話しかけてきて本当に賑やか、子供同様にはしゃぐので時にはうるさく感じます。また、これだけの人数ですと、正に多士済々で、昆虫生殖学の権威である某大学の名誉教授やら、“幸せなら手をたたこう”の作詞者から哲学・言語学や歴史・地理の権威など意外と教授層が多い反面公務員とは殆ど会いません、そしてマジョリティは主婦パワーです。上陸時に地図も良く分らず、英語も定かでない数人の主婦グループは持ち前の元気で市場に買い物に出かけ、見事立派に値切り倒して戦利品を袋に意気揚々に帰船してきました。私のこれまでの1人旅の行動概念ではとても理解できません、国によって偽警官などに乗客が脅かされた例もあり船側は注意喚起に躍起になっていましたが。これには外務省発行の海外安全情報が、各訪問地は危険であるとかかなり脅し的に書き過ぎのきらいがあり、出来れば欧米の国が自国民に対しどのような旅行情報を流しているのか勉強してもらいたいと思います。旅行会社もこの情報をベースに安全を強調し、私のような個人行動を認めたがらず、なんとかオープンショナルツアーなどの団体行動に誘導しましたが、その内容、費用、手順・段取りなどの評価は芳しくありません。日本国内があまりに安全であり警戒信号はある程度必要ですが、情報提供などいささか過剰ではないかと感じました。

・船旅の良さは十分な時間、自分なりの使い方を工夫できることです。これまで読めなかった本をどっさり持ち込み、読書三昧も魅力でしょう。航海中水平線、大海原、白い雲と青い空以外何も有りません、9回デッキからの視界は東京23区ほどです。インド洋や大西洋、南太平洋では行き交うタンカーやコンテナ船も少なく、見つけるとそこには船員さん達が乗り込んでいるのだと人間くさい仲間意識も湧きますし、時に目をこらすとトビウオが飛び、イルカも併走、水際鳥が羽を広げ水面すれすれに飛ぶ姿、フォークランド島では鯨の潮吹きなど、ささやかながら変化もあります。しかし、視界が殆どきかない煙霧、船首側に黒雲が現れるとすごいスコールが来襲、ひとたび、海がうねり、荒れはじめると様相は一変し、激しく風雨がたたきつけ、その揺れは私にとり耐えられないほどでは有りませんが、トラベルミンなどの酔い止めの薬の消費量が急増するようで、乗り物酔いに弱い人にとっては事前準備が必要です。ただ、その後の見事な虹には感嘆の声が上がります。そして、穏やかな海、日の出や日の入り、夕焼けの美しさなどが嫌なことを全て消し去ってくれます。

南極への旅はかなりの揺れに遭遇しましたが、それを耐えた甲斐あって、圏内では2日間風も少なく、良い天気です。荘厳な氷河、冰山、そして鯨、アザラシ、ペンギンなどを十分に堪能しました。船内で事前にNHKプロジェクトX、「昭和32年の南極日本観測隊」のビデオを見たので、日本が貧しい時代に一番厳しい環境の地区を割り当てられ、苦難の末に見事やり遂げた感激と重ね合わせ、忘れがたい思い出となりました。また、南米南部のパタゴニアではビーグル水道、マゼラン海峡を通過し、さらに滅多に見られぬチリ西岸のフィヨルド地域をベーニヤ湾の奥まで入り込むなど、500km余は氷河を含め雄大・荒涼とした景色に1.5日間デッキに釘付けとなり大満足でした。

・今回の旅は年末年始を挟む旅でした。通常であれば、その準備のために何かと慌ただしい時を過ごし

てきましたが、今回はあつという間にこの期間を過ごしてしまいました。船にはNHKの海外放送や新聞が毎日届けられることは無く、4、5日に1度新聞の抜粋記事が掲示板に貼られ、また3週間に1度程寄港地で1週間以上遅れの日本の新聞がどさっとまとめて届けられる仕組みです。どうやら、慌ただしさの原因は自らにもあるのですが、大宗は国内でのマスコミの騒ぎ過ぎではないかと痛感しました。

また、本当に皆写真好きで、殆どの方が高級な望遠レンズ付きのカメラからタブレット、スマホを活用して撮りまくり、それを家族や友人達宛メッセージを付して船内からメール送付しています。私のように旅では写真を撮らない、モバイルしないのは化石人種なのかもしれません。ただ、バス旅行などから戻って振り返ると写真派は撮って安心してしまっているのか場面毎の印象が薄いようで、私のこの目での印象話を興味深く聞いてくれることもありました。

・船旅と飛行機の旅、それぞれ個人の好みに応じた良さがあります。あえて船旅を中心に考えれば、荷物移動の必要が無い、収容能力が大きく買い物などで制限が少ないなどの物理的な良さ以上に、船内で自分なりに時間を有意義に使い、社交ダンスやウクレレ、太鼓などを初心者ながらもそれなりにマスターすることが可能です。お好みで船客と積極的に語り、飲むことも良いのですが、インド洋、大西洋、太平洋の横断では単純な洋上生活が10日近く続き、じっとしていられない人が多いのですが、何もしない、しなくても良い事のありがたさも実感できます。特に世界一周旅の売り込みに対し、100日以上の上陸は先ず行くべきかどうか決めるのにいささか大きな決断が必要で有り、上陸時は私のように数少ない個人行動派に、船会社からの都市・地図・両替などは極めて情報不足で結構自分の思うに任せないことが多々ありましたが、自分史を書き上げ、下船各都市の訪問記録も作成できました。相対的には制約は少なく好き勝手、自由に生活でき、帰国時は“長旅をやり遂げたぞ”という満足感・充実感を持つことを参加者全員が共有出来るので一度は経験しても良いのではないのでしょうか。 以上